1Na-8

起立性調節障害の社会生態学的研究

○　大澤清二　笠井直美
（大妻女大）

近年自律神経系の不調をともなう不定愁訴（起立性調節障害、ＯＤ）を訴える児童が非常に高い頻度で観察される。演者らの昭和５６年以来の広範囲（日本、タイ）にわたる調査結果からすると調査地によって変動はあるものの小学生で数％、中学生、高校生では２０％程度がＯＤと判定される。これらの児童は夜更かし、朝の覚醒状態の不調、不定期の排便、朝食の欠食、午前中の不調、注意力の散漫、乗り物酔い、倦怠感などの諸症状を訴え、自律神経平衡が特に午前中に乱れており、学校生活や社会生活上も様々な不適応症状を引き起こしている。しかも、こうした現象は北京やバンコクでも共時的に見い出されており、都市化との関係が注目される。しかし、これらの不定愁訴は特定の独立した疾患ではなく死亡に至る危険性もないために、医学的には関心も低く今日に至っているが、その高い頻度は社会的にも教育的にも重要な問題となりつつある。そこで本研究では児童生徒の不定愁訴は単に生物学的・病態学的にのみ説明されるものではなく、高度に情報化されつつある社会状況のもとで社会生態学的視点からも解明されるべきであるとの立場から日本全国の児童生徒集団を対象に生活環境やライフスタイルと不定愁訴の関係を疫学的に追及した。